



1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて!

北朝鮮人権侵害問題啓発週間

作文コンクール

2023

入賞作品集



1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて!

北朝鮮人権侵害問題啓発週間
作文コンクール **2023**

入賞作品集

北朝鮮による拉致問題は、我が国の主権や国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、時間的制約のある拉致問題は、ひとときもゆるがせにできない人道問題です。日本政府は、全ての拉致被害者の一日も早い帰国を実現すべく、政府一体となって、総力を挙げて取り組んでおります。

拉致問題の解決のためには、日本国民が心を一つにして、全ての拉致被害者の一日も早い帰国実現への強い意思を示していくことが重要です。政府としては、拉致問題に関する啓発活動にも力を入れて取り組んでおります。特に、これまで拉致問題に触れる機会の少なかった若い世代への啓発が重要な課題となっております。

かかる観点から、政府拉致問題対策本部では全国の中高生を対象に、拉致問題関連の映像作品や舞台劇の視聴、拉致問題関連書籍の読書等を通じて拉致問題を知ってもらい、拉致被害者やその御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何ができるのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2023を実施いたしました。

本作文コンクールでは、全国から応募のあった三五七二作品の中から、厳正なる審査の結果、最優秀賞及び優秀賞並びに特別賞を選定するとともに、本作文コンクールに積極的に参加している学校を団体賞として選定いたしました。

最優秀賞及び優秀賞の入賞者には拉致現場を視察いただき、令和五年十二月十六日に行われた表彰式では最優秀賞入賞者の四名から視察時の感想を発表していただきました。

この度、入賞作品を文集にしましたので、是非、御一読いただけますと幸甚です。

令和六年二月

政府拉致問題対策本部

作品総数

3,572作品

中学生部門 1,945作品／高校生部門 1,600作品／
英語エッセイ中学生部門 16作品／英語エッセイ高校生部門 11作品

最終審査委員

北朝鮮による拉致被害者家族連絡会
横田 拓也 代表

株式会社 産業経済新聞社
中村 将 大阪本社編集局長

法務省
柴田 紀子 大臣官房審議官

ニューヨーク大学
ロバート・ボイントン 教授

外務省
實生 泰介 アジア大洋州局審議官

神戸大学
ルックス・ジョン・マシュー 准教授

文部科学省
浅野 敦行 大臣官房学習基盤審議官

ジャパン・インターカルチュラル・コンサルティング
ロツシェル・カップ 社長

内閣官房拉致問題対策本部事務局
平井 康夫 内閣審議官

※記載の役職は審査当時のもの





団体賞

A decorative ribbon graphic with a hexagonal top and a pointed bottom, containing the text '団体賞' (Group Award).

本作文コンクールに積極的に参加している学校を対象に団体賞を設けております。
今年度、団体賞を受賞されました学校は左記のとおりです。

岩手県花巻市立花巻北中学校

アオバジャパン・インターナショナルスクール

東京都練馬区立開進第二中学校

山梨県北杜市立甲陵中学校

大阪府立寝屋川高等学校

大阪府立水都国際中学校・高等学校

神奈川県立厚木東高等学校

敬愛学園高等学校

中学生部門

最優秀賞

市川さんに託されたバトン

薩摩川内市立祁答院中学校 三年

羽島 奈穂

「ただいま」「おかえり」そんな何気ない会話さえできない家族が私の近くにいる。

中一の時、アニメ『めぐみ』を観た。めぐみさんと家族はとても幸せそうだった。その時間は北朝鮮によって突然断ち切られた。母の手料理を食べる、兄弟と遊ぶ、そんな当たり前のことができない。我が身に置き換えると、ぎゅつと胸が締め付けられた。

私は政府主催の「拉致問題中学生サミット」の代表に選ばれた。「めぐみ」を思い出すだけで怖いのに、この問題に向き合えるのかと迷った。両親の「良い経験になる」という言葉が背中を押し、拉致について学習を始めた。これまでの取組を調べるうち、次第に「全国の中学生と拉致問題を考えよう！」と決意した。しかし台風により参加断念となり、とても悔しかった。サミット当日の夕刻、地元鹿児島市の拉致被害者、市川修一さんの兄健一さんが拉致現場付近で解決を訴えているニュースを見た。私は健一さんに会いたくなくなった。

八月三十日、市川健一さん龍子さん夫婦とお会いできた。健一さんは「兄ちゃん」と呼ぶ修一さんをとっても可愛がっていたから、そんな弟と急に会えなくなるとは考えもしなかったそうだ。大規模な捜索の甲斐なく十七年の月日が経ったある日、「修一さんは北朝鮮に拉致され、まだ生きている。」という情報が元工作員からもたらされた。「生きてさえいてくれれば」、家族は皆で涙を流したそうだ。そして、印象深いお話をされた。修一さんは初給料

でお母様に大島紬の着物をプレゼントしたが、拉致が起き一度も袖を通すことなくタンスに眠ったままだという。お母様は、「修一が帰って来た時これを着て出迎える。」と言われていたが、叶わぬまま亡くなった。ご両親の意思を継ぎ、残されたご家族で懸命な救出活動にずっと取り組まれている。最後に市川さんからメッセージを託された。『人の命は地球よりも重い、命は大事です。小さい時からそれを思っていて欲しい。人が困っていたら助ける、行動を起こすのは難しいがそれができたら、人間として最高の行為です。私達が署名活動や講演をしている時「一緒に頑張りましょう、私達も手伝いますよ。」と皆が拉致問題解決への決意を心に刻んで欲しい。思いがけないことが起きるかもしれない人生。少し足を止め、家族と過ごす何気ない日々に感謝して欲しい。人には様々な考えがあっても一番大切なのは会話です。会話によって人の心は変われますからね。』ご夫婦のお話には大きく心を揺さぶられた。あの日から、私は拉致問題の報道により大きな関心を寄せるようになった。市川さん夫婦から託されたこのバトン、今度は私が皆に広く伝え、渡す番だ。「皆の人權が尊重される当たり前の日々を願い、命と何気ない日々感謝しましょう。」と。

入賞者のコメント

拉致問題を、同世代の人たちと一緒に考え、という声を聞くまで私も諦めません。

自分たちの問題として解決に向けて繋いでいきたいです。「ただいま」



優秀賞

「心から笑い合える日のために」

八街市立八街南中学校 三年

中村 夢優

びっくりしました！こんな事があるなんて。アニメを見て大きな衝撃を受けました。私は今、十五歳。めぐみさんが拉致された年齢にとっても近いです。自分が大好きな家族から引き放されて、船に乗せられ、北朝鮮に連れ去られたらどうでしょう。想像するだけで怖くて震えます。そして残された家族の思い。探しても探しても見つからない悲しい日々。

私は拉致問題についてもっと詳しく知りたいと思い、インターネットで調べました。北朝鮮が拉致をする主な目的は、自国の工作員が日本人になりすまして活動するためだと知りました。そして、拉致の疑いがある行方不明者はなんと七百人もいることがわかりました。日本は平和だと思っただけで暮らしていたことが、少しはずかしくなります。七百人もの方の家族がめぐみさんのご家族のように辛い気持ちで日々を送っているのですから。また、お父さんの横田滋さんは二〇二〇年にめぐみさんと再会しないまま亡くなってしまったのです。愛娘にどんなに会いたかったかを考えると、本当に悔しいです。

「めぐみちゃんと家族のメッセージ横田滋写真展」開催の広告を目にしました。たまたま近くに用事があり、家族で立ち寄りしました。

そこには、拉致される前のもとても明るく幸せに笑うめぐみさんとご家族の写真。またそれとは対照的な、抑えても抑えても涙が止まらないお父さんとお母さんの悲しい泣き顔。

私が特にショックだったのは、北朝鮮から送られた拉致された当時の学生証の写真です。「ああ、本当にめぐみさんは北朝鮮に連れていかれてしまったんだ。これは現実のことなんだ。」と、実感し、心がつぶれたような気持ちになりました。ネットよりずっと身近に感じ、見逃さなくてよかったですと思いました。

ただ、気になる点もありました。休日にもかかわらず、来場者が高齢の方ばかりだったことです。学生と思われる人はひとりもいませんでした。これではだめです。もっと多くの人の心を動かさなくては！めぐみさんは今も北朝鮮で暮らしているのです。今すぐにでも日本にかえしてもらいたい。そして、待つているご家族に、ご高齢のお母さんに、一日でも早く会わせてあげなくてはならないからです。めぐみさんも、どれほどお母さんに会いたいかか……。考えると胸が詰まります。

中学生の私に何かできることはあるのでしょうか。あります。伝えることです。たくさんの人に伝えて、力を合わせることで。会場では「会いたい」という大きな文字を、たくさんのお小さな千羽鶴で囲んで表していました。まるで小さな力でも集まれば、大きな力になるという象徴のようでした。

「会いたい」たくさんの方が心から願えば、それは絶対に、実現できると信じています。

心から笑い合える日のために……。

入賞者のコメント

みんなの心が動く時、一人ひとりの力が大きな力となって、変化が起こるはず。この活動が広まり、めぐみさんとご家族が会えることを信じています。

優秀賞

「自分ごと」として考えること

沖縄県南大東村立南大東中学校 三年

池田 七星

八月十日に開催された「拉致問題に関する中学生サミット」に県の代表として参加しました。私はその中で拉致被害者、横田めぐみさんの弟である横田拓也さんの講話を受け、改めて、問題を解決する為に必要なことについて考えさせられました。

横田拓也さんは当時のお話をする前に、「自分ごと」として考える、受け止めることの重要性をお話していました。横田めぐみさんは、十三歳の時に拉致されています。中学一年生の冬、ごく当たり前に学校に行き、部活で汗を流し、その後、帰宅途中に拉致されました。海岸沿いから徒歩で五分の所に自宅、そこから更に十分の所に学校。実際の地理も交えた、めぐみさんが拉致されてから、拉致が発覚するまでのお話。アニメや文獻などを見るよりもずっと、あの時その場にいたような気持ちになり、鳥肌が立ちました。

横田拓也さんの講話が終わり、次の制作の説明を受けながら、先ほどの話をぼんやりと考えていました。ふと、私は私自身がめぐみさんや拓也さんに対して「かわいそう」ではなく、ただ純粹に「辛い」と感じていたことに気が付きました。それはアニメを見た時、拉致問題に関する本を読んだ時とは明らかに違う感情でした。その時、初めて私はこの問題を「自分ごと」として真正面から考えられていたのです。

普段、私は日頃起きている問題を「自分ごと」として捉えられているだろうか。同性婚が未だ認められていないことや、悲惨な

事件のニュースを見ても「かわいそうだな」「大変そう」と感じても、自分ごととしては捉えられていない。それは、自分自身のことについて表面的な事しか知らないからではないだろうか。では「自分ごと」として捉えられるにはどうしたら良いのだろうか？ 本当の心情は当事者にしか解らない。しかし、「知る」ことは出来ます。私が拉致問題について当時の話を聞いたたり調べたりしたこと自分ごととして考えることが出来た様に。

カラーバス効果、というものがあります。関心を持ったものが日頃の生活の中で自然と目に入る、というものです。こんな問題がある、と心に留めておく。もし、ネットやニュースでそのことに関することがあればきつと貴方の目に留まるはず。そうやって日々、ちよつとずつ問題に触れていく事でより問題が身近になつていくとおもいます。

次は、誰かにそれを伝える番です。友達や家族と話したり、インターネットで発信してみたり。そうやって関心の輪を広げていく事で、より多くの人が「自分ごと」として考えるきっかけになり、問題の解決につながっていくのではないのでしょうか。

入賞者のコメント

この作文を読んで、拉致問題にとどまらず身近な地域の問題に目を留めて問題の解決に自分出来る事は何なのかを考えるきっかけになればと思います。



特別賞

一步踏み出そう

新潟市立寄居中学校 三年

藤田 孝惇

「拉致」それは一体どのようなものなのか。辞書で調べてみると、そこには「無理に連れていくこと」と記載されている。しかし、北朝鮮による拉致問題はそれだけではないから問題なのだ。

私が卒業した小学校、現在通っている中学校は、横田めぐみさんの母校だ。そのため、毎年拉致問題について考えることは当たり前のことだ。小学一年生のときから、めぐみさんの同級生の方々と交流し、「コスモスのように」というめぐみさんのことを想う歌を歌い、ビデオを観るなどして、学んできた。しかし、年齢を重ねるうちに、それは全て受け身でどこか他人に頼っている自分がいることに気が付いた。今まで、拉致問題や北朝鮮について考えることが当たり前な環境に置かれているが故に、自発的に行動を起こしてこなかったのだ。

そんな中で今回、「拉致問題に関する中学生サミット」に参加した。早く拉致被害者が帰国できるように行動しなければならぬという想いは皆同じだが、ではどうしたら良いのかという具体的な糸口は多くの人が確立していないということを、そこで最も感じた。ワークショップで班ごとに拉致問題呼びかけのためのCM劇づくりをしたが、ほとんどの班の作品が、拉致問題や被害者の「実態」を伝えるものだった。ふとふり返ると、自分が何をどうしたら解決できるか考えても、いつも「どうせ自分一人では無力だろう。」と諦めてしまっていた。何かしなければならぬことは分かっている。でもどうしても行動を移せ

ない、そんな状況に置かれている人がほとんどなのではないか。日本政府は問題解決のために集会を開いたり、署名活動をしたりしている。しかし、今まで拉致問題の解決に至らなかったのは、何か足りないからだ。パンフレットや公式サイトには「拉致被害者の出身国は日本だけでなく、他に十カ国に及ぶとされている。」と書いてある。国連を中心に各国が協力して行っている活動もあるが、その活動を加速させるためにも、署名などに協力し、国際社会に少しでもアピールをすることができれば。これからの社会を担っていく私たち中学生にもできることはあり、前述した「足りないところ」でもある。そう思わせてくれたサミットだった。

北朝鮮による拉致問題は被害者本人の自由、御家族の希望、友達への期待、さまざまなものが奪われる。待っている時間はない。雨だれ石を穿つという言葉を信じてどんなに小さなことでも早急に取り組みたい。そして問題解決に至るまで被害者の方々が「コスモスのように」の一節にあるように、「地に足をふんばって」「しっかりと頭を揚げて」生きていることを願っている。

さあ、一步踏み出そう。

入賞者のコメント

この活動が机上の空論で終わらないように、これから先も私たち若い世代が拉致問題について考えなければなりません。日本が「一步前へ」進むために。

特別賞

一日でも早い拉致被害者の帰国を

茨城県牛久市立おくの義務教育学校 九年

北山 桃凧

横田めぐみさんの当たり前の日常は突然奪われました。部活帰りに北朝鮮の工作員によって拉致されました。当時まだ中学一年生でした。なぜ横田めぐみさんは拉致されなければならなかったのか、なぜ当たり前の日常を引きさかれなければならなかったのか、学校でアニメ「めぐみ」を視聴した私は、胸が張りさけるような気持ちになりました。

北朝鮮は拉致問題を解決済みであると主張しています。決して受け入れることが出来ない主張です。私達にとつての拉致問題の解決は拉致被害者全員が帰国することです。国連のシンポジウムでは日本やアメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ連合など六十カ国以上の国によって拉致被害者の即時帰国を北朝鮮に求める決議案が共同で提出され、昨年で十八年連続の採択がされました。日本以外の多くの国でも北朝鮮の拉致問題について解決を目指して取り組んでいます。オールジャパンだけではなく、世界各国で取り組んでいる問題が北朝鮮による拉致問題です。私達に出来ることは、北朝鮮に対して拉致被害者を一日でも早く日本に帰国させてほしいという声を上げ続けることだと思います。十三歳で拉致された横田めぐみさんは今年で五十九歳になります。人生の多くの時間、北朝鮮での生活を余儀なくされています。言葉も分からず、知っている人が誰もいない生活です。これほどつらい経験は誰にもさせてはならないと私は思います。このような事実を見て見ぬふりをするのではなく、この作文などを通して声を上げるこ

入賞者のコメント

拉致問題を絶対に風化させてはいけないという思いで書きました。諦めず声を出し続けることが、拉致被害者全員
の帰国実現に繋がると信じています。

とで一日でも早い拉致被害者の帰国に繋がると信じています。このような出来事を風化させてはなりません。政府の取り組みだけではいずれ風化してしまうのではないのでしょうか。風化させないためには私達一人一人が北朝鮮による拉致問題について理解し、後輩や子供、孫など世代の垣根を超えて伝えていくことが必要なのではないのでしょうか。拉致被害者全員の日本への帰国が実現するその時まで私達は拉致被害者の即時一括帰国を求め続ける。世代を超えたとしても私達は決して忘れない、誰一人取り残さない、拉致被害者の最後の一人が帰国するその時まで私達は決して諦めないという一人一人の強い思いを繋いでいきたいと思えます。

拉致が行われてから少くない年月が経ちました。拉致被害者も高齢化し、横田めぐみさんの父親である横田滋さん、田口八重子さんの兄である飯塚繁雄さんなど拉致被害者に再会することなくお亡くなりになられた人もいます。一刻も早く拉致被害者の帰国を実現し、家族との再会が求められています。大切な人が拉致されたその日から、まだ時計の針は止まったままなのです。一日でも早く大切な人に再会出来ることを願っています。



特別賞

拉致問題について

東京都八王子市立松が谷中学校 二年

竹越 桃佳

アニメ「めぐみ」は私に大きな衝撃を与えました。毎日いつもと変わらない朝を迎え、何の不安もなく、学校へ行き何事もなく眠る。そうした生活をしている私からは、想像がつかない事件でした。めぐみさんは私と年齢が近く身近に感じられました。だからなおのこともし私だったらと考えると、恐怖で頭がおかしくなりそうです。

一九七〇年時代に新潟県や福井県など日本の各地でカップルや中学生が突然姿を消すという事件が相次ぎ当時は原因が分かりませんでした。その後こういった人々が北朝鮮に拉致されたということが分かり、このうちの一人が横田めぐみさんでした。めぐみさんは、一九七七年十一月十三歳の時に新潟で拉致されました。学校のクラブ活動のバドミントンの練習を終えて家に帰る途中で。北朝鮮は韓国と戦争したこともあり、ずっと対立していました。だから北朝鮮は韓国にスパイを送りこんで混乱させようとしていました。そこで、北朝鮮は日本人になりすまし、韓国に自由に行くことを考えました。そのために北朝鮮は日本人を拉致し、日本の習慣や日本語を教える先生になってもらおうと考えたのです。

なぜ国と国との争いに一般市民が巻きこまれたのか。国が責任をもって対応し解決しなければなりません。また、国民全体の協力で大きな声をあげ政治を動かして解決させなければなりません。だれも声をあげずに待っていたら、解決できず真相も分

かりません。微力ながらも私はこうした問題がいまも起きつづけていることを多くの人に知らせることで、めぐみさんもはやく助けてあげたいと思いました。また今後こういった被害が起らないために、一人一人が学び、また、日本として他国との外交に力を入れ、よい関係を築いてほしいと強く願っています。

これから私がやるべきことは、たくさんの人とコミュニケーションをとり、こうした問題をひろく、ひろく伝えていくことです。また、小学四年生の時に視覚障害者の人の役に立ちたいと思いつき点字検定を受けたことを思い出しました。日本だけでなく他国の人もコミュニケーションを築くために、勉強に励み拉致問題の解決に役立ちたいと思います。

入賞者のコメント

尊厳はたとえ子どもでも人として尊重されるべきでそれを他人や国が奪うことは許されない。また関心をもち続ける事が風化させないことにつながる。

高校生部門

最優秀賞

継承し横田滋さんの信念に学ぶ

盈進中学高等学校 二年

池田 和音

「娘に会いたい。」ただその一心で、拉致被害者家族会の初代代表を務めて長年、妻の早紀江さんと共に街頭に立った。全国の学校をまわり、講演を千四百回行った。

だが、思いは叶わなかった。当時十三歳だった娘のめぐみさんが北朝鮮に拉致されてから四十三年が経っていた。めぐみさんが贈った誕生日プレゼントの櫛を肌身離さず持っていた横田滋さんは二〇二〇年六月、八十七歳の生涯を閉じた。

拉致被害という重たすぎる問題を、私はいつも滋さんを通して考えていた。「穏やかで温和。」テレビの滋さんはそんな印象だった。世論や運動が北朝鮮に対して先鋭的に傾いたときでも、滋さんの姿や声、コメントは冷静で、対話的解決を重んじていたと私は感じていた。そして滋さんを通して、拉致問題は重大な人権蹂躪の問題ととらえるようになった。

かつて横田家は、めぐみさんの名前を公表するかどうかで意見が割れた。公表すれば、北朝鮮によってめぐみさんが殺されるかもしれないという恐怖があった。しかし、滋さんは「Y・M」では世論に訴える力が弱いと判断し、公表を選んだ。父親として絶対に娘を取り戻すという強い意志がそこにあった。滋さんは、家族を被写体にして写真を撮ることが好きだった。アニメ「めぐみ」(政府・拉致問題対策本部)にでてくる写真の数々。滋さんのめぐみさんへの溢れる愛情が伝わってきた。滋さんにとって、家族をカメラに収めることがしあわせな「普通の日常」

であった。だが、それは突然失われた。滋さんはあの日以降、写真を撮らなくなった。

滋さんの訃報に焦りを感じる自分があった。このままだと被害者の家族だけでなく、本人たちも亡くなってしまいかもしれない。北朝鮮はその時を待っているような気がする。

日本国内のこの問題に対する関心も低下しつつあるように感じる。その状況に私は危機感を覚える。ありきたりかもしれないが、国民みんなが強い関心を持ち続けること、国民ひとりひとりがこの人権侵害問題を絶対に許さないと意思表示をし続けることこそが、滋さんの信念と行動を引き継ぐこと、そして、北朝鮮を動かすことにつながると思う。

二〇〇二年十月、蓮池薫さんら五人の拉致被害者が帰国した。その際、めぐみさんの死亡が告げられ、滋さんはいつになく人目を憚らず号泣した。だが滋さんは、家族会の代表として、「元気でいた方の家族は、遠慮せずによるこんでください」と気遣った。私は、そんな滋さんの責任感とやさしさと勇気を心から尊敬する。そういう人に私もなりたい。

その蓮池薫さんはいま、こう語る。「なんとしても拉致被害者の親世代が生きているうちに、被害者全員の帰国を実現させなければならぬ」と。それは私の思いそのままである。この問題は他でもない、私の問題なのだ。

入賞者のコメント

拉致問題は現在進行形の人権侵害問題であるということを訴え続けます。彼らの思いを忘れず、一刻も早く全員の帰国が実現できるように行動し続けます。



優秀賞

私の強みで

敬愛学園高等学校 二年

木越 美望

「北朝鮮拉致問題」での被害者が、五百名以上存在すると言われて、知っている人はどのくらいいるのだろうか。私も正直、この作文を書くにあたって問題について調べるまで知らなかった。またこの拉致被害は日本の他、十か国以上にまたがると報告されている。この拉致問題の卑劣さ、深刻さ、そして解決の必要性を世に訴え、後世に伝えていくことが、当事者でない私が今できることなのではないかと思う。そしてこの作文がその一つになれば嬉しい。

拉致問題の映画「めぐみ」を今年改めてもう一度観た。昨年もちろん、拉致被害がなくならないことに対しての怒りやもどかしさを感じたとともに、家族の懸命な姿に胸を打たれた。だが今年には昨年の想いに加えて、どうにか被害者の方の力になれないかと考えた。映画を観たあと部員とディスカッションを行ったのだが、そこでは私と同様、被害者の方の力になりたい気持ちも挙げられた他、「この作文コンクールの他に、拉致問題に関する活動があれば積極的に参加して自分の想いを発信したい」「大学に進学したら拉致問題に関するサークルを立ち上げよう」という多くの人がこの問題を知ってもらおう場を作りたいなど問題解決に向けた意見が多く挙げられた。

被害者家族の高齢化が進んでいること、また新型コロナウイルスの流行により、その活動は以前に比べて勢いが大きく削がれてしまった。そんな現在、若者の発信力が重要となってくる

のではないかと。現在行われている署名活動や路上の呼びかけなど、できることはたくさんあるはずだ。その意味で作文コンクールを今後も継続する他、演劇やスピーチなどの機会も一つの方法である。また映画「めぐみ」を授業や部活動の中で観る学校が増えれば、私が昨年映画を初めて観て拉致問題に興味を持ち、自分で調べて多くの啓発を得たように、「自分にできること」を真剣に考える若者が増えるのではないかと。私の武器である「弁論」は、聴衆に自分の想いを伝えることのできる、非常に発信力のあるものだ。拉致問題に関する活動を続ける意味や解決案、国民全員で拉致問題に向き合ってほしいという私の想いを、弁論を通して伝えていきたい。

拉致被害の当事者でない人が拉致被害の現状に関心を持つことで、初めは小さいことでもそれを多くの人に取り組めば、やがて政府を動かす、問題解決に近づけることができるだろう。横田めぐみさんが北朝鮮に拉致された十一月十五日は、私の誕生日でもある。友人や家族からの祝いの言葉に包まれる私と、拉致被害のニュースで悲しみや怒りの空気に包まれる世の中。そんな光景を目の当たりにして、私は毎年複雑な気持ちになる。そんな十一月十五日が、世界中の人全員が幸せに包まれる日となりますように。

入賞者のコメント

応募するにあたって、国民全体で解決すべきものであることを知りました。私の作文を通して、自分ができることを考えるきっかけになれば幸いです。

優秀賞

キタ問題にチヨウセンする

西武台千葉高等学校 一年

鈴木 稔秋

北朝鮮人権拉致問題は四十六年の月日が流れている。この問題・事件について知っている人、関心を持っている人がどれだけのだろうか。そして、北朝鮮人権侵害問題啓発週間をご存じだろうか。私は「そんなことがあったような」と薄い記憶だった。夏休みの課題で考えるきっかけとなった。政府対策本部ホームページや動画、アニメや書籍を見た。アニメ『めぐみ』の劇中に出てくる横田めぐみさんの「お父さん！お母さん！」と叫ぶ声がずっと耳に残っている。

私には姉がいて、中学でバドミントン部だった。母は一九七七年生まれで、拉致事件が起きた年に生まれた。出てくるキーワードがなんとなく私の家族とリンクしているようで、胸が抉られるような気持ちになった。どれほど卑劣で残酷、悲痛なものであるか、想像を絶した。この問題は現在進行形で、この事件に関わった方々は深い傷を負い、今もその傷は癒えることなく、血が流れている。

次に、今までの中・高校生が書いた作品を読んだ。皆、思う気持ちとは私と同じだった。私たち世代の理解・認識不足と拉致問題の風化が問題だ。被害者家族の皆さんが作った家族会は全国各地、そして海外まで活動を広げ、一刻も早い解決に尽力を注いでいる。しかし、日本で起きた歴史的かつ、重大で国際的な事件が消えそうだ。

ここからは、私たちが始める挑戦を考える。身近なところから

められることは、社会や総合学習など授業での学びだ。教室で仲間と共有し合い、知識・理解を深める。そして、冒頭での「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」についても、人権週間があるように、この啓発週間を大きく発信していくべきだ。それに併せて、ブルーリボンを全国の小中高生や大学生に配布し、身に着けることで意識を高める。その他、メディアやSNSを活用したり、なにかとコラボレーションなど、情報を多岐にわたるように発信してみる。今の世相に合わせた活動も始めてみるのはどうだろう。私はどんな些細なことでもいい。それを見たら、北朝鮮人権拉致問題が未だに、未解決であることを浸透させる必要があると考える。

日本の歴史は、一人ひとりが積み上げてきた人生の時間の上に、私たちも生きていく。四十六年前、愛する家族を拉致されたことで、その家庭全ての人生が狂い、平穏な日常を奪われた。守られるべき人権は、全ての人々が個人の生存と自由を持ち、幸福な生活を営むために欠かすことのできない権利だということを忘れてはならない。この問題が早急に解決され、全員が帰国をし、皆で心の底から生きていて幸せだと感じてほしい。私たち自身が日本をより良く、そして、自分の大切な人たちの笑顔を守っていきたい。私たち世代にキタ問題へのチヨウセンはこれからだ。

入賞者のコメント

このような賞をいただき、とても驚きました。拉致問題に対しての向き合い方を大きく考えさせられた期間でした。次は行動に移していく力をつけていきたいです。



特別賞

悲劇で終わらせてはならない

宇都宮短期大学附属高等学校 二年

北辰 奏子

大切な人と一緒にいられること。一緒にご飯を食べ、小さなことで笑い合い、同じ未来を一緒に夢見ることができると。それは決して特別な幸せではない。日常の中にある、普通の幸せだ。しかし、それは拉致問題の被害者とその家族が、取り戻したいと願いつづけてきたことだ。本来、家族が再会することが難しいことであってはいけない。それなのに、拉致によつて家族が引き離され、日常の幸せが壊された状態が四十年以上続いている。そんな異常な現実が、この「拉致問題」なのだ。

北朝鮮による日本人拉致問題は、一九七〇年代から一九八〇年代にかけて、多くの日本人が日本や欧州から北朝鮮に連れ去られた問題だ。北朝鮮は長年この問題の存在を否定していたが、二〇〇二年の第一回日朝首脳会談で日本人拉致を初めて認めて謝罪した。その後五人の被害者が帰国を果たすが、残りの被害者については、死亡又は北朝鮮入境が確認できないとされた。しかし、死亡の事実を裏付ける客観的な証拠が全く提示されていないため、日本政府は被害者が生存しているという前提に立つて、被害者の即時帰国を求めている。

拉致問題を初めて知ったとき、私は強い衝撃を覚えた。こんなに理不尽で過酷なことが他にあるだろうか。この問題を調べていくうちに、帰国された被害者の方や、まだ帰国することのできていない被害者の帰りを待ち続けるご家族の思いに触れ、強く思ったことがある。それは、この問題は他人事でも昔のこ

ともない。自分たちと同じように日本で暮らしていた人々が、その日常を壊され、夢や絆を奪われた、極めて重大な人権侵害だということだ。今でも自由を奪われ、苦しんでいる被害者がいる。拉致問題を解決し、被害者の方に大切な人と一日でも早く再会してもらわなければならない。そう強く思う。

そのために私達ができることは何だろうか。それはやはり、「知ること」そして「伝えること」、この二つだと思う。拉致問題について正しい知識を得て、被害者やその家族の苦しみに想いを馳せ、自分事としてこの問題を考えること。そして、拉致問題のことを、必ず解決しなければならぬことを、多くの人に伝え続けること。多くの人が関心を寄せ続けなければ、この問題は歴史の中に埋もれてしまう。それは絶対にいけない。被害者が過酷な運命の中で一生懸命生き抜いたこと、被害者の家族がこの問題を解決するべく戦い続けたこと。私達はそれを忘れず、一日でも早く、青い日本海で隔てられた二つの想いを繋ぎ止めるなければならない。この問題の解決に向けて、自分にできることを少しでもやっていきたいと思う。また、被害者とその家族が日常の幸せを取り戻せることを願っている。拉致問題を悲劇で終わらせてはならない。

入賞者のコメント

この作文では、拉致被害者とその家族の、日常の幸せを奪われた苦しみに焦点を当てました。一日も早い解決のため、自分にできることをしていきたいと思えます。

特別賞

北朝鮮拉致問題について

愛媛県立松山商業高等学校 二年

森本 悠輝

私は今まで「北朝鮮拉致問題」について耳にしたことはあつたけど、詳しくは知りませんでした。この問題について調べていくうちに悲しい思いがすぐく込み上げてきました。

北朝鮮拉致問題とは、日本人が北朝鮮に拉致され、長期間にわたって拘束されるという問題です。この北朝鮮による拉致問題は、日本人の命や自由を奪う行為であり、人権の侵害です。被害者たちは、家族や友人との別離、自由を奪われた状況での生活、拷問や虐待など、非人道的な扱いを受けています。この人たちは自分の意思で北朝鮮に渡ったのではなく、無理やり拉致されました。このような行為は、国際的な法に違反しており、決して許されるはならないものです。

この問題に対して高校生の私ができることはあると思います。まず、被害者たちの救出と帰国を願う声を広めることが重要だと思います。また、この問題についての情報を詳しく理解し、関心を持つことも大切だと思います。拉致問題を知らない人はいると思うので、その人たちにも情報を広めることで、少しでも実状は伝わると思います。今の時代はSNSが盛んになっています。そこでメディアやインターネットを活用して情報を収集して、自身で考える力が大事だと思います。さらに、この問題についての学校での授業や地域で行われているイベントに積極的に参加することも私にできることの一つだと思います。

また、拉致問題は国際的な問題でもあります。それにより、国

際的な視点においても、この問題についての関心を持ち、声を広めるということがすごく重要になると思います。私の友人や家族などのたくさんの人との声を一つにして、国際社会に訴えることで、被害者の人たちの救出につながる可能性があると思います。なので同じ日本国民として、少しでも被害者の救済を訴えていきたいです。

私たちのような高校生はあまり関係ないと思う人がこの日本にはたくさんいると思います。でも、拉致された人たちは同じ国に住み、私たちと変わらない生活をしてきた人たちです。だから、同じ国民として少しでも高校生の私でもできることをしていきたいです。そして一人でも多くの拉致された人たちが無事に日本へ帰ってきてほしいです。この問題だけではなく、今も世界では人権侵害が行われているので、これから一つ一つの人権問題についての関心を持ち、知識を深め、自分に何ができるのかを考え、世界全体で平和になれば良いと思います。

入賞者のコメント

この問題について、まだまだ知らない人がいると思います。なのでこの作文から、多くの人たちに拉致問題についての現状を知ってもらい、もっとこの問題への関心を深めてほしいです。



特別賞

今、動く日がやってきた

東京都立本所高等学校 二年

太田 一平

「あれ？それまだ解決してないの？」

私が拉致問題について友達に話した時、開口一番にそう言われました。もう五十年近く経っているのだから自然な感想かもしれない。でも、北朝鮮が日本人を拉致した事件はまだ本当に解決していないんです。どうして社会党の議員秘書は、相談に来た被害者家族に「お気の毒ですねぇ」とだけ言って取り合わなかったのか。どうして外務省は拉致問題を国交正常化に向けた障害でしかないという冷血な判断ができたのでしょうか。どうして北朝鮮が日本人を拉致していることが分かってもそれが社会に広まらず、助けようとする動きが強化されなかったのか、不思議で仕方ありません。語らずとも被害者とその家族、関係者から言及がはばかれるような強い怒りと混乱、そして失望を感じます。そして、遂に家族が再会できぬままこの世を去ってしまいはじめています。

この作文を書くとき決意したのは、去年の啓発週間でした。駅の電光掲示板に小さく啓発週間を伝える文章が流れているのを見て「今も拉致されている人がいるんだ」と意識が変わり、資料を読んだり、拉致問題について友達と話したり、SNSでも行動しました。本当はこの作文を書く必要がなくなっただけなのに、残念ながらそうなりませんでした。

私の祖母は新潟県柏崎市の人です。私にとって拉致問題は比較的「身近」な問題でした。ですが、中学校でアニメ「めぐみ」

を見た時に、もちろん心は痛みましたが「もうこれは過去のことで解決することはできない」とあきらめてしまいました。でも去年の啓発週間にその考えが変わったのです。拉致問題を「風化」させたら「日本人を拉致しても五十年すればうやむやになる」という例ができ、また拉致が起るかもしれない。それに、国民を国が見捨てるという可能性は今でも、誰にでもあります。しかし、拉致被害者になる可能性は今でも、誰にでもあります。しかし、今の日本はまた同じことがあってもきつときちんと対応できませんし、今日も拉致被害者を助けられています。

拉致問題は、私のような高校生にはあまりに大きくて複雑な問題です。この作文には書ききれないけど伝えたい、知ってほしいことがたくさんあります。だからみんなにもっと興味をもつて調べてもらいたい、一緒に解決のための行動を起こしてほしい。拉致問題は「過去の悲劇」ではなく「今の国の存在意義を揺がす大問題」なんです。

「お気の毒ですねぇ」なんて二度と言って欲しくない。今必要なのは、拉致被害者をなんとかしても救出するという強い意志と行動です。

入賞者のコメント

拉致問題に関心を持ってもらいたくて作文を書きました。これからも自分がとれる行動をしていきたいと思えます。

英語エッセイ中学生部門

英語エッセイ高校生部門



Our solution

TANI Sota

9th grade, Kumamoto Prefectural Uto Junior High School

A couple who wished to be as happy as possible. It was a simple wish, but one day that happiness was suddenly shattered. They can't see, talk or even be near each other, The Yokota family has actually had to deal with such a harsh situation. It is impossible for us to understand how much hard they felt.

In the 2017 public opinion poll on foreign affairs released by the Cabinet Office 40 years after the abduction of Megumi Yokota, 78.3% of respondents cited the issue of Japanese abductions, falling below 80% for the first time and the become lowest since 2002. I found that particularly younger people were not interested in the issue, and I tried to find out why the level of interest had declined. I believe it is the bias of media coverage on nuclear issues. I want you to look up "North Korea News" on the Internet right now. It is clear evident that most of the coverages are on the nuclear issues, but very few articles on abductions. So I believe what is important for young people is the opportunities to learn about abductions. There are two specific ways to take advantage of these opportunity.

First, we should have discussions with people around us. By talking about the abduction issues with friends or family members, we can exchange opinions and deepen our interests in the issues and exchange correct information. In fact, my class had time to learn and exchange ideas in civic class. In the class, we had several ways to exchange our opinions, and found contradictions between the general opinions and the emotional opinions. Discussions give us the benefit of increasing concreteness and making it easier to take action.

Second, we should actively participate in awareness-raising activities. In fact, I did not know much about abductions until I studied them. However, my teacher taught us abduction issues and I became interested in them, which gave me the opportunity to look into them deeply. So I think it is wonderful to participate in something like this contest that can teach us a lot and even others.

In a world where compassion often fades amidst daily routines, the story of the Yokota family stands as a poignant reminder of the fragility of happiness and the need for unwavering empathy. Their heartrending experience serves as a call to action for each of us to transcend our own concerns and engage earnestly with issues that shape lives beyond our own. By breaking the cycle of apathy through genuine discussions and active participation, we can infuse our generation with a renewed sense of responsibility, awakening the potential for positive change and a brighter future.

There is a limitation to what we can do, but there is a great value in what we can do. We, students, can do what I told you. At the end of this essay, I will tell all of you that I will sustain my curiosity, try hard to spread knowledge about the abduction issues to people around the world, and contribute to the solution.

入賞者のコメント

拉致問題という大きな課題に対してどのようなことが有効的か考えました。少しでもみなさんの心に残るものがあれば幸いです。



最優秀賞

私達の解決策

熊本県立宇土中学校 3年

谷 颯太

人並みの幸せを願った夫妻。一見単純そうな願いでしたが、ある日をきっかけにその幸せは突然崩れ去りました。話すどころか目を合わせたり近くにいることもできない。こんな過酷な状況が実際にあった横田家。どれだけの思いを抱えたのか、はかり知れません。

横田めぐみさんが拉致されてから40年後の2017年内閣府が発表した外交に関する世論調査で、日本人拉致問題を挙げた人は78.3%と初めて80%を切り、平成14年以降最低となりました。特に若年層の関心が低いことがわかり、なぜ関心度が減少したのか調べ、考えました。それは核問題でのメディアの報道の偏りだと私は考えます。今インターネットで「北朝鮮 ニュース」と調べてみてください。大半が核問題についての取り上げで拉致についての記事が少ないことがわかります。このため私は、今若者に重要とされる事は拉致について知る機会だと思います。その機会は具体的にどうやって得るのかというと2つあります。

1つ目は身近な人とのディスカッションなどをする事です。友人や家族などと拉致問題について話すことで、意見を交換し合い関心を深め正しい情報交換をすることができます。実際に私のクラスでも公民の時間を使い授業をし、意見交換をしました。そこでは一般論、感情論などと話し合い方を変えて話し合ったりして一般論と感情論での矛盾が見つかりました。またディスカッションをすることで具体性が増し、行動に起こしやすくなるという利点があります。

2つ目はこの作文コンクールのような啓発活動に積極的に参加することです。実際に私もこれまで拉致について一切知りませんでした。ですが先生から勧められ興味を持ち、調べるきっかけが出来ました。そして私がこれを書くことによってあなたに興味をあたえることができました。なのでこのような事に参加することは自分に知恵を与え、他人までも巻き込むことのできる最高の事であると思います。

日常の中で思いやりの心が薄れがちな世の中で、横田さん一家の物語は、幸せのもろさや揺るぎない共感の必要性をとて感じるものだと思います。彼らの体験は、私たち一人一人が自分の心配だけではなく、自分以外の人生を形作る問題に大切に取り組むための行動喚起となると思います。正しい議論と積極的な参加を通じて無関心の連鎖を断ち切ることで、私たちの世代に新たな責任感を与え、前向きな変化と明るい未来への可能性を呼び覚ますことができると思います。

結論として、学生には限界があるかもしれませんが、私たちができることには大きな価値があります。上記のアプローチは、学生でも実行可能です。最後に、私は引き続き探求心を持ち、世界中の人々に拉致問題について知識を広めるために努力し、解決に向けて貢献していきたいと思います。



Abductions of Japanese Citizens by North Korea

Elio ESPOSITO

7th grade, AOBA-JAPAN INTERNATIONAL SCHOOL

November 15, 1977, was like any other ordinary school day for a thirteen-year-old girl named Megumi Yokota who lived in Niigata. Megumi walked home from school after her badminton practice but she didn't come home and was never heard from again.

As I consider myself a normal thirteen-year-old student living in Japan, I can't imagine the fear and pain that Megumi's family must have experienced. I wonder if Megumi herself could even comprehend what was happening to her and when she would learn that the strangers who abducted her were North Korean spies.

At the time, the former North Korean leader Kim Jong-il gave the green light for a program to abduct Japanese citizens. This decision resulted in seventeen Japanese citizens being abducted. The purpose of this program was to use Japanese abductees to assist the agents in the North Korean Reconnaissance General Bureau ("RGB") with Japanese language and culture so they could be more effective spies. They also stole the abductee's identity when they travelled abroad on missions.

Megumi was the first abductee taken in Japan by North Korea in 1977. In subsequent years another sixteen Japanese citizens were abducted plus an unknown number of people from various countries including South Korea, China, Singapore, Thailand, Malaysia, Romania, France, Lebanon and Italy. My own family originated in Italy and Japan so was shocking to learn that abductees were taken from both countries and could easily have been members of my family.

It was not until September 17, 2002, that the North Korean government admitted and apologized for thirteen abductions of Japanese citizens. The North Korean government made this announcement to normalize relations with the Japanese government. The North Koreans also acknowledged that only five abductees were still alive and would be returned. Unfortunately, Megumi was said to have died in 1994 however her family cannot accept this information without evidence. Many of the other families of abductees who were said to have died feel the same way as Megumi's family.

Since 2002, there hasn't been any significant progress regarding this North Korean abduction issue despite ongoing Japanese public interest. Despite the complexity of this issue, I still believe a solution is possible. Similar to the South African Truth and Reconciliation Commission, Japan and North Korea could arrange a similar commission for abductees and their families. Such talks should focus on the truth, not to blame or punish those responsible. Only through the truth will the victims and their families find some peace and closure.

In conclusion, these abductions are an unresolved but important issue for the Japanese people. Despite the political challenges, I believe the only solution involves disclosing the truth about what happened to each abductee. I hope one day the truth will be revealed including that of Megumi.

入賞者のコメント

拉致被害は世界の問題として解決策を探す必要があり、そして拉致被害はまだ解決されていないという事を、世界中の人に知ってもらいたいです。



優秀賞

北朝鮮による日本人拉致問題

アオバジャパン・インターナショナルスクール 1年

エスポージト エリオ

1977年11月15日は、新潟に住む13歳の少女、横田めぐみさんにとって、いつもと変わらない登校日でした。めぐみさんは、バドミントンの練習を終えて、学校から徒歩で下校しましたが、家には戻らず、消息不明になりました。

日本に住む普通の13歳の生徒である私には、めぐみさんの家族が経験したはずの恐怖と苦痛を想像することができません。めぐみさん自身、自分の身に起きていることを理解できたのか、いつ自分を拉致した見ず知らずの人たちが北朝鮮の職員だと知ることになったのかと、考えてしまいます。

当時、北朝鮮の金正日元総書記は日本人拉致計画にゴーサインを出しました。この決定により、17人の日本人が拉致されることになりました。この計画の目的は、北朝鮮の偵察総局（「RGB」）の職員がより有能なスパイになれるよう、日本人拉致被害者を使って、彼らに日本語と日本文化を習得させることでした。

また職員らは、任務で海外に渡航する際には、拉致被害者になりすましました。

めぐみさんは1977年に、北朝鮮が日本で最初に行った拉致の被害者になりました。その後、さらに16人の日本人が拉致され、韓国、中国、シンガポール、タイ、マレーシア、ルーマニア、フランス、レバノン、イタリアなど、さまざまな国から無数の人々が拉致されました。

私の家族はイタリアと日本の出身なので、拉致被害者が両方の国から連れ去られたこと、また、被害者が私の家族であってもおかしくなかったことを知り、衝撃的でした。

北朝鮮政府が13人の日本人拉致を認めて謝罪したのは、2002年9月17日になってからでした。北朝鮮政府は、日本政府との国交正常化のためにこの発表を行いました。

北朝鮮はまた、5人の拉致被害者のみが生存していることと、その帰国を認めました。残念ながら、めぐみさんは1994年に死亡したと言われていますが、家族は証拠もなしにこの情報を受け入れることはできません。死亡したとされる他の拉致被害者の家族の多くも、めぐみさんの家族と同じ思いです。

2002年以降、この北朝鮮拉致問題は、引き続き日本国民の関心が高いままにあるにもかかわらず、大きな進展はありません。私は、この問題が複雑であるとはいえ、まだ解決が可能だと信じています。南アフリカの真実和解委員会と同様に、日本と北朝鮮は拉致被害者とその家族のための同様の委員会を設けることができるでしょう。そのような協議は、責任者を非難したり罰したりするのではなく、真実に焦点を当てるべきです。真実によってのみ、被害者とその家族は何らかの平和と終結を見出すことができるのです。

結論として、拉致問題は日本人にとって未解決ではあるものの、重要な問題です。政治的な課題があったとしても、私は、拉致被害者一人一人に何が起こったのか、真実を明らかにすることが唯一の解決策だと信じています。めぐみさんを含め、いつの日か真実が明らかになることを私は願います。



To my helpless self

OKUDA Ria

11th grade, Osaka Prefectural Suito Kokusai Junior & Senior High School

"It is okay because Japan is at peace."

I think somewhere in the back of my mind I was thinking like that. No one can imagine that their beloved family would disappear the day after their birthday. However, that is what actually happened to Megumi Yokota and her family.

Watching the anime "Megumi" triggered me to think deeply about the North Korea abduction issue. Even though I could not truly understand the heartache, I was able to put myself in their shoes. It is easy to imagine that both I and my family would suffer if my family became victims or if I became a victim myself. My mother also likes to take pictures and record her experiences, so there was an overlap with Megumi's father, who often took pictures. I felt from the bottom of my heart that this should never happen.

"What do you think we should do to get them back?" When my teacher asked me, I thought even if a complete solution was difficult, I thought it was possible to take a step toward a solution or to prevent it. I have two ways to do this.

The first is to build community ties. I think it is important to have local connections and watchful eyes in order to prevent not only abductions but also kidnappings. Ms. Megumi was abducted in a secluded place. A system that notifies people that they have left school when they return home may seem a bit cumbersome, but I thought it would be good to utilize such a system as well, since we believe it also prevents incidents.

The second is to communicate the information without letting it fade away. I think that the fading away of the incident is the worst thing that can happen to the victims' families and in terms of the prevention of future incidents. Megumi's brother also said, "The thing I fear the most is the fading away of the incident."

Also, in "Megumi," what impressed me was Megumi's mother's comment, "I don't hold grudges against the North Koreans, I just want them back. Even with the abduction and missile issues, it is not okay to hate North Korea as a whole." Simply hating North Korea will not solve anything, and only time will pass. Since this is a problem between countries, I felt that it is important for the people of the country to raise their voices together. In addition, in "Megumi," I was also impressed by the fact that passersby ignored the flyers of the victims' families. We must not think that it is irrelevant, but think of it as if it were our own matter and raise our voices.

It is easy to think that we cannot do anything because we are powerless. However, that will not change anything. It is important to actively communicate with local people and schools, to use systems to ensure safety, and to be very aware of the abduction issue and communicate it.

入賞者のコメント

拉致被害者たちが自国に帰れるように、国々の若者たちは訴え続けなければなりません。私はそれを知らせる責任があると感じています。



最優秀賞

無力な自分自身へ

大阪府立水都国際中学校・高等学校 2年

奥田 莉有

「日本は平和だから大丈夫だよ」

私は心の奥のどこかでそう考えていたと思います。大切な家族が誕生日の翌日に消えてしまうなんて誰にも想像できません。しかし、それは実際に横田めぐみさんとそのご家族に起こったことなのです。

アニメ「めぐみ」を見たことが、北朝鮮の拉致問題について深く考えるきっかけとなりました。彼らの心の痛みを本当に理解することはできなくても、彼らの立場を自分に置き換えてみることはできました。もし自分の家族が被害者になったり、自分自身が被害者になったとしたら、私も家族も苦しむでしょう。それは容易に想像することができます。私の母も写真を撮って色々な体験の記録をすることが好きなのですが、それは、よくめぐみさんの写真を撮っていたという、彼女のお父さんの姿と重なりました。心の底から、こんなことは決して起こってはいけなと感じました。

「拉致被害者たちを取り戻すために私たちは何をすべきだと思いますか？」と先生に尋ねられたとき、完全な解決策を考えることは難しいとしても、解決に向けて一歩踏み出すことや、被害を防止することは可能だと思いました。そうするためには2つの方法があると思います。

1つ目は、地域社会との結びつきを築くことです。拉致だけでなく誘拐をも防ぐためには地域のつながりを持ち、互いに見守ることが重要だと思います。めぐみさんは人目につかない場所で拉致されました。学校から帰宅する時に、下校したことを知らせるシステムはやや面倒なものかもしれませんが、そのようなシステムを活用することで、事件を防止することもできると思います。

2つ目は、情報を風化させないよう、伝えていくことです。事件が忘れ去られてしまうことは、被害者のご家族が直面し得る事態ですが、これは今後の事件防止という点で最悪のことだと思います。めぐみさんの兄弟もこう言っています。「私が最も恐れていることは、事件が忘れ去られてしまうことです」。

「めぐみ」で印象的だったのは、めぐみさんのお母さんの言葉です。「私は北朝鮮に恨みを抱いていません。ただ拉致被害者たちを取り戻したいだけです。拉致問題やミサイル問題があっても、北朝鮮をひとまとめにして憎んではなりません」。単に北朝鮮を憎むことでは何も解決しないし、ただ時間が過ぎていくだけです。これは国家同士の問題なので、国民が一緒になって声をあげることが重要だと感じました。また「めぐみ」で、道ゆく人々の中に、被害者のご家族のチラシを無視する人々がいるという事実を知り、それが深く印象に残っています。この問題を自分に無関係のものと考えてはなりません。私たち自身の問題として考え、声を上げる必要があります。

無力だから何もできないと考えることは簡単です。しかし、それでは何も変わりません。地域の人々や学校と積極的にコミュニケーションを取り、安全を確保するシステムを利用するとともに、拉致問題について意識を高く持ち、それを伝えていくことが大切です。



“With the world ~What we can do as high school students~”

TANAKA Yuki

10th grade, Shukutoku Senior High School

I don't want to tell a lie, so I'll tell what I honestly think about “the abduction.”

I knew that North Korea had abducted Japanese people in the past, but I didn't have much interest in it.

At such time, my mother showed me the movie “Megumi.” I watched the anime at 1.5x speed. However, now that I think about it, I am ashamed of myself and wonder why I acted in such a way without thinking about the abductees or the person who made the movie.

When I learned about what happened to Megumi on the day of her abduction, and I imagined the fear she felt at that time, I felt anger and pain. After watching that movie, something in my heart clearly changed.

A while later, I knew there was a lecture by Sakie Yokota, Megumi's mother, so I attended the lecture and met her for the first time. After hearing her story directly, I felt that she has never given up and is living every minute of her life strongly. On the other hand, she seemed like a normal person to me. In other words, people who were living a normal life just like me suddenly became victims.

Apart from this lecture, when I heard the words of the family of Miyoshi Soga, another abductee, I realized that it wasn't just an abductee that was robbed, but also very precious time. Even if the abductees return to Japan, the precious time will never come back. I realized that they had been robbed of all the time such as time around the table with family and time with friends at school.

Now that I understand the feelings of abductees and their families more deeply, what can I, a high school student, do for them?

I am currently studying abroad. Far away from Japan, I am thinking about “the abduction” and imagine what the abductees and their families feel, and wondering what I can do.

I believe that most Japanese have the same feelings about “the abductions” no matter where they are. Or rather, this feeling should be shared all over the world. However, I suppose that many people in the world don't know about “the abduction.” I asked my homestay family and friends from countries other than Japan if they knew about “the abduction.” Their answer was “No.”

In Japan, everyone knows about “the abduction.” However, I realized that there are many people outside of Japan who don't know about it.

Therefore, I believe that talking about “the abduction” with my friends and teachers in countries other than Japan and thinking about positive solutions together with people around the world is what I can do as a high school student.

I believe that we should not only face the issue of “the abduction” within Japan, but the entire world. Let's do our best and never give up until the end.

入賞者のコメント

私達は一本でも三本でもない、何億もの矢です。絶対に折れないし、必ず的に届きます。そんな思いを込めて書きました。



「世界とともに ～高校生として自分たちにできること～」

優秀賞

淑徳高等学校 1年

田中 悠貴

嘘はつきたくないで、「拉致」について自分の考えを率直に書こうと思う。北朝鮮が過去に日本人を拉致したことは知っていたが、あまり関心がなかった。

そんな時、母がアニメ映画『めぐみ』を見せてくれた。映画は1.5倍速で視聴した。だが、今思えば、恥ずかしいことをしたと思う。拉致被害者の方々のことも、映画を作った人のことも考えずに、どうしてあんなことをしてしまったのだろう、と。めぐみさんが拉致された当日の様子を知り、その時の恐怖を想像すると、怒りがこみ上げ、心が痛んだ。映画を見て、自分の心の中の何かが明らかに変わった。

それからしばらくして、めぐみさんの母親にあたる横田早紀江さんの講演会があることを知って参加し、そこで横田さんに初めてお会いした。直接お話を伺って、横田さんが一度もあきらめることなく、人生の一分一分を力強く生きていらっしやると感じた。それと同時に、横田さんは普通の方にも見えた。言い換えれば、私と同じように普通に生きていた方々が、突然被害者になったのだ。

この講演とは別に、同じく拉致被害に遭われた曾我ミヨシさんのご家族のお話を伺って、拉致は被害者自身だけでなく、実に貴重な時間も奪ったのだと実感した。拉致被害者が日本に帰ってきても、その貴重な時間は二度と戻ってこない。家族と食卓を囲む時間、学校で友達と過ごす時間など、一切の時間を奪われたのだと思った。

拉致被害者の方々とそのご家族方のお気持ちをより深く理解した今、高校生の自分にできることは何だろう。私は今、海外に留学している。日本から遠く離れた地で、「拉致」について考え、拉致被害者の方々とそのご家族方のお気持ちを想像し、自分にできることを考えている。多くの日本人は、どこにしようと「拉致」に対する思いは変わらないと思う。むしろ、この思いは世界中で共有されるべきだ。だが、世界の人々の多くは「拉致」のことを知らないのだろう。ホームステイ先の家族や、日本国外の友人に、「拉致」のことを知っているか聞いたことがある。答えは「ノー」だった。

日本では、誰もが「拉致」について知っている。その一方で、日本国外ではこれについて知らない人が大勢いることに気づいた。このことから、日本国外の友人や先生と「拉致」について話し合い、世界の人々と共に前向きな解決策を考えていくことが、高校生の自分にできることだと思った。「拉致」という問題には、日本国内だけでなく、世界全体で向き合っていかなければならないと思う。全力を尽くそう。最後まで諦めずに。

この作品集は、令和5年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された「北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2023」応募作品の中から入賞作品を収録したものです。
文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2023入賞作品集

令和6年2月発行

発行 | 政府拉致問題対策本部

〒100-8968 東京都千代田区永田町1-6-1

TEL:03-3581-8898

<https://www.rachi.go.jp>



令和6年2月発行